

カケハシ

目次

【特集】 P2～6

レポート

ひとひと
女と男のフォーラム2010足利

【トピックス】 P7

レポート

日本女性会議2010きょうと

【いきいきライフに乾杯！】 P8

「おひとりさま」を満喫しています

足利発、アメリカンドリームに向かって



ジャズ・アーティスト

山田 ケンゴさん

ソフトな印象とは裏腹な重厚な音を奏でるテナーサクソ奏者山田ケンゴさんは、アメリカから足利に帰郷し、夢の一つだった東京でのジャズライブを実現しました。すでにCD発売、インターネット音楽配信など、国内外で精力的なプロ活動をしています。

そんな彼の転機となったのは高校卒業後に出会った英会話の先生の「うちにホームステイしないか？」という一言。右も左もわからないまま、半ば無計画に単身で渡米したそうです。

その後ニューヨーク州立大学でジャズ理論とビジネスを学び、サクソの師となるブルース・ジョン

ストン氏と出会います。

「音楽に限らず、実力さえあれば、年齢や国籍に関係なくチャンスがつかめるのがアメリカ」と、今年秋には再び渡米。そして、同12月にはナイアガラ大学大学院を卒業し、MBA(経営学修士)を取得しました。

「音楽は楽しむため、本業としてはMBAを活かしてアメリカで会計士として働きたい」と、これからの夢を語ります。努力も苦労と感じさせない彼の笑顔は、自分自身でつかんだ『夢の充実感』に満ち溢れていました。

特集 ^{ひとひと}女と男のフォーラム 2010足利

しあわせの見つけ方

男女共同参画社会の実現を目指した「女と男のフォーラム」が、9月4日(土)市民プラザにおいて開催されました。今年は、講演会と4つの分科会を行い、たくさんの方にご来場いただきました。



誰もが、できるだけ自立して生きる高齢者になりたいと願うわけですが、最近では、自分で自分のことができない「ロコモティブ症候群」と呼ばれる状態に陥ってしまう方が多いそうです。

「ロコモティブ症候群」になってしまっているかどうかを自己診断できる項目を教えてくださいました。

- ① 片足でくつ下を履けない。
- ② 敷居でつまづきそうになる。
- ③ 横断歩道を渡りきれない。
- ④ 階段に手すりが必要。
- ⑤ 15分、歩き続けられない。
- ⑥ 2キロ程度の重い物が辛い。
- ⑦ 布団の上げ下ろしや掃除機を持つなどの家事が辛い。

以上の項目にあてはまってしまいう方は要注意のこと。

講師 内藤 いづみ さん



1956年、山梨県生まれ。福島県立医科大学卒業。86年、英国プリンス・オブ・ウェールズ・ホスピスで研修を受ける。95年、甲府市に「ふじ内科クリニック」を開設し、院長となる。「いい医者いい患者いい老後」など著書多数。

講演会

しあわせの見つけ方

昨年、在宅ホスピス医療の第一人者である内藤いづみ先生に「在宅ホスピスは、ありがとさようならがひとつになるところ」と題して、人はいかに自分らしい最期を迎えることができるのかというお話をいただき、たいへん好評だったため今年も講演をお願いしました。

最後に、末期ガンになりながらも力強く生きた患者さんの事例もお話しされました。

その方は大工さんで、余命3ヶ月と宣告されながらも、痛みを抑えながら2年間生きたのだそうです。

しかも肺ガンだというのに、たばこをふかしながら、亡くなる直前まで仕事を続けたそうです。本当はたばこなんか吸ってはいけないのですが、家族も内藤先生も最期まで自分らしく生きるという本人の意志を尊重して黙認したのです。

内藤先生は「余命なんて絶対信じちゃダメですよ。気持ちの持ちようであつたかわわってしまうものだからね」と笑顔でおっしゃいました。こちらがとても安心できる、力強さと優しさを感じる笑顔でした。

今回のお話をうかがい、「幸せも心身の健康も寿命も、全ては自ら見つけて創るもの」ということを知ることができました。

お忙しいなか、私たちに生きる勇氣とよりよい死を迎える決意を与えてくださった内藤先生に心から感謝申し上げます。

(W・A)



今回は、男女共同参画ということ

で、まず先生のご両親のお話をしてくださいました。なんと、ご両親は男女共同参画運動をしているなかで偶然出会い、内藤先生がお生まれになったそうです。「私は実は男女共同参画の申し子なんです」とユーモアたっぷりにおっしゃり、会場を笑いの渦に巻き込んでいました。

また、「男女共同参画とは互いを尊敬しあうことであり、そこから幸せが生まれるのだけれど、幸せは決してもらうものではなくて、自分で創るものなのです」という言葉が深く心に響きました。

続いて、人間の尊厳について三つ教えてくださいました。

一つ目は「生きたい」という意思、二つ目は「知りたい、学びたい」という意思、三つ目は「仲間になりたい」という意思が人間の尊厳なのだそうです。私はこのなかでも、現代人にもっとも必要なのは「仲間になりたい」ということではないかと感じました。人間関係が希薄になってきた今、さまざまな問題が起きている。幼児虐待や高齢者の行方不明者が多数出てしまうなど、考えられないことです。

私たちがいつまでも若々しく、心身ともに健やかでいられるためにはこの「仲間力」というものがとても重要なのだそうです。

また、先生は「健康寿命」という意味深い言葉をおっしゃっていました。健康なまま、いかに寿命を自身で

第1分科会

虐待、暴力のない社会へ

●コーディネーター

大島 裕子さん(実行委員)

●パネリスト

仲村 久代さん

(NPO法人サバイバルネット・ライフ代表)

岡崎 浩子さん

(足利市地域包括支援センター職員)

吉間 巧子さん(実行委員)

第1分科会では、3人の方に、それぞれの立場から虐待について語っていただきました。



仲村さん

岡崎さん

吉間さん



しあわせの見つけ方
在宅ホスピス医 内藤 いづみ さん

全うするかということだと理解しましたが、その具体的な方法についても教えていただきました。

まず、健康寿命を延ばすためには、「骨を丈夫にする」「血管を若く保つ」「内臓を丈夫にする」「仲間力をつける」「死生観を持つ」ことが必要とのこと。

そのためには、日ごろから努めて簡単な筋力トレーニングもすると良いそうです。とは言っても、なにも難しいことではなく、片足で10秒立つとか、テーブルや台所の流しのへりにつかまりながら、膝を曲げ伸ばしするスクワットを10回ほどしてみることが、いつでもどこでもできるような方法を教えてくださいました。

仲村さんは、シェルター「ステップハウス」を運営し、被害者が自分の力で自立できるように支援をしています。主に男女間のDVについてのお話で、「DVは決して他人事ではなく、誰にでも起こりうることです。DVを受けている人たちは、地域の中の温かいつながりがなければ生きていけない」と強くおっしゃっていました。

岡崎さんは、地域包括支援センター職員という立場から、高齢者の虐待についてのお話をしてくださいました。足利市には65歳以上の方の総合相談窓口として市内4カ所に包括支援センターがあり、受け付けたものを関係機関につなげているそうです。また、高齢者に対しての身体的虐待は息子が一番多く、その要因は介護疲れ、介護者の病気、経済的な苦しさ、相談相手が少ないなどだそうです。

吉間さんは、保育所長をされていた経験をもとに、児童虐待について実例を三つ話されました。子どもへの虐待は、家庭環境が原因となることが多いそうです。虐待を受けていても、自分が悪いからと親をかばう子ども。母親の育児放棄も虐待につながっていくとのこと。

ここで、「外から気づきにくい」とですが、私たちに何ができるのかというコーディネーターの問いかけが、パネリストの方へありました。それには、「行政が相談機関に被害

者と一緒に行ってあげるなど、専門的に紹介することがよい」「温かい言葉かけ、かわり、地域の目、声かけが必要と思う」「子育ては親の責任という考えが強いが社会の責任でもある。気がついたら通報するなどの早期発見を」などの意見が出ました。

会場からは、「虐待されている側もしている側も気づいていないのでは」「老老介護と言われていますが、認知介護の場合、ネットワークが必要になるのでは」「父親の介護をしている。社会から取り残されているように感じていた」「聞き役となるボランティアの人たちがいると良い」などの発言がありました。



「虐待のない、暴力のない足利市になることを願って」というコーディネーターの言葉で閉会となりました。(Mi・K)

第2分科会 オレ流子育て

- ファシリテーター
足立 純さん
(足利市役所男性初の育児取得者)
- 吉田 素之さん
(ルーキーパパ・実行委員)
- 大木 淳さん(フレイリター)
- 新井 隆さん(フレイリター)

今回の子育て分科会は、本年6月30日に、改正育児・介護休業法が施行された背景を感じさせる内容となりました。

出生率が1・37にとどまってしまっている状況のなかで、夫の家事育児の時間が長いほど第2子以降の出生割合が高いという調査結果を受け、国も育児に積極的な男性「イクメン」を後押しするキャンペーンとして「イクメンプロジェクト」を立ち上げています。

では、我が足利市におけるイクメン事情はどうかという事で、会場には名だたるイクメン達が顔をそろえママ達も交えてその本音を語り合うことになりました。



プレイベント・パパのベビーマッサージ

参加人数は25名で、ご夫婦が3組にベビーが1名という状況でした。実行委員から開会のあいさつが行われ、そのなかでこのフォーラムに先駆け8月29日に名草ふるさと交流館で開催したプレイベントの様子なども述べられました。

突如、会場内にテンポのいいBGMが流れ、今日の目玉企画といえるイクメンファッションショーが開幕されました。モデルはファシリテーターの方々が務め、音楽と解説に合わせて場内を歩いた後ステージ上でポーズ。それぞれが手にした育児便利グッズについてのコメントも、しっかりきまっていました。



イクメンファッションショー



会場の雰囲気すっかり和んだところで、それぞれファシリテーターを核に4グループに分散してNEOパパ・トークが始まりました。

どのグループも活発な意見と笑いが飛び交うなか、家庭ではママとのバランスに気を遣い、職場では嫌味に耐えながら、まじめすぎるほど一生懸命にイクメンをやっている姿が見えたように思います。

途中、小休止をはさんで実行委員の三田さんから「子どもの権利条約」や「子どもの権利条約」について、話題提供がありました。

ファシリテーターの新井さんからも、足利市の「子ども権利条約」に

第3分科会 多文化共生

- コーディネーター
橋本 敏博さん(実行委員)
- パネリスト
堀本アンキャロルさん
(足利市国際交流協会相談員)
- リー・ハーパーさん
(アメリカン・ブリストル講師)
- 金子 裕美さん(青年海外協力隊OG)



堀本さん



リー・ハーパーさん



金子さん

まず、橋本さんから「足利市における外国人登録」の現状についてのお話がありました。約3千人の方々がおられ、既に人口の2%に達し50人に1人の割合だそうです。

次に、パネリストの自己紹介と、文化、習慣、生活のしやすさなどを中心に日本と外国の違いについて発表がありました。

堀本さんはフィリピンの方で、初め日本語不足で話が理解出来ずに困ったことから始まり「日本には健康保険制度があつて家族は安心して生活できます。フィリピンは大家族が多くお互い助け合いをしますが、日本は助け合いが少ない。それとプレゼントをお金ですることが多い」など文化の違いは大きいと話されました。



第3分科会のテーマは、「多文化共生」で国や民族の異なる人々が文化の違いを認め合い、共に生きてゆくこと。それに「ワーク・ライフ・バランス」についてでした。



リー・ハーパーさんは米国から来て現在は結婚されています。「日本は安全な国で宗教も自由です。色々自由な点が多いのですが『差別』はあります。アメリカと比べると、日本の警察官は友達のような。」

リー・ハーパーさんのお話からは、日米の違いについて改めて知ることが多くありました。

金子さんはポリビアのことを話されました。「女性に対しても親切で住みやすいのですが、インフラ整備は遅れぎみです。バスの時刻表はあっても1、2時間遅れることもあります」とのことでした。

(Ma・O)

第4分科会

豊かな老後の
くらし



イベントの様子



足利についての感想は皆さんほぼ共通で「山や川があり田舎が残り、お店は商品が豊富ですぐ手に入り便利すぎるように思う。東京も近くてとても住みやすい所」ということでした。
最後に橋本さんから「本音と建て前」についての質問に対し（通訳の方が微妙な点を説明）「文化が異なるので理解は難しい」と言われていました。
(Ma・K)

- コーディネーター
高橋 良男さん(実行委員)
- 講師
古益 均さん(筑波病院院長)

●パネリスト

- 岡本まゆ子さん(論々書院主宰)
- 保々 政司さん(かけはし編集委員)
- 小倉喜兵衛さん(足利絵馬の会長)

今を元気に過ごしていこうとしゃる3名のパネリストと、講師に吉益さんをお迎えし、「元氣」にありがとうをテーマにパネリストそれぞれのお話から第4分科会は始まりました。

岡本さんは足利市で長く教員として勤められ、現在87歳。参加者に配られた『私の一週間』は、コーラス、エッセ、書、友人との時間等、知的好奇心に溢れています。このスケジュールを『あんだんて(ゆっくり歩むように)』で続けることが元氣の元です。



吉益さん



岡本さん



保々さんと小倉さん

保々さんは『三つの元氣の元』として、『コンサートのプロデュースをする喜び』、『孫三人を養育する喜び』、『コーラスで歌う喜び』について話されました。それらの喜びを、家族や友人と分かち合い、バイタリティー溢れる毎日を過ごしています。絵馬の会長でもある小倉さんは「寿命は天で決めるもの」と毎日を悔いのないように楽しんでます。「北斎や座頭市のモデルも足利にゆかりがあり、絵馬と同様、足利市は歴史の宝庫」と、その魅力を熱く語りました。

まとめとして吉益さんは「岡本さんは多くの分野に興味を持ち、持続されていることが素晴らしい。保々さんは企画とお孫さんを通して社会的役割を持ち続けている。小倉さんは歴史に興味を持ち、女性ファンが

多い。これらのことが、皆さんが元氣でいられる秘訣」とおっしゃいました。
そして「高齢者のうち半数が健康に不安がある。病気があっても病人にならないようストレス解消が大切。健康管理は人任せでなく自分で実行すること」と話されました。
質疑応答では在宅医療について触れられ「今後の課題として取りあげていきたい」と高橋さんからのお話もありました。
パネリストの皆さんの共通点は「良い仲間・好奇心・感動」。その元氣をもたらした会場は大盛況のうちに閉会しました。
(Y・H)





10月1日〜2日に京都で「日本女性会議」が開催され、足利市から参加した須長由美子さんに感想を寄せさせていただきました。

今年で27回を迎えたこの大会は、昭和59年の第1回名古屋市大会をスタートに、毎年全国各地から多くの参加者が集い、男女共同参画社会の課題と将来像を発信し続けています。

インテグレーション(統合)

須長 由美子さん

1日目は「デートDV」をテーマにした分科会へ参加しました。デートDVとは、例えば、身体的暴力はもちろん、携帯電話のチェックや友人との付き合いいや行動を制限するなど、相手に対する束縛をすることです。

講師の上村先生は産婦人科の院長をしながら、中高生からの相談を1日100件以上受け付けているそうです。



京小町踊り子隊



相談をしてくる女子生徒のうち10%がデートDVの被害者で、しかも、自分達が被害者だと自覚していないケースが多く、恋愛相談などをしていくうちに、デートDVだと発覚する場合も多いそうです。また「特殊な子ども達」の出来事ではなく「普通の子ども達」にも起きています。

先生は「根本にあるものはさびしさ」「大人たちが子ども達とじっくり向き合って、話を聴いてあげることで予防できる」「家庭で、教育現場で、しっかりとデートDVについて、性教育について教えていくことが重要。大人も正しい知識を身につけることが重要」とお話しされました。

先生と大学生を交えてのパネルディスカッションでは学生達から「デートDVの相談をされたらどうしたらいいですか?」「自分のできる範囲でサポートしたい」など、活発な意見が交わされました。

2日目は渥美雅子さん(弁護士、女性と仕事の未来館館長)による講演、京都市長を交えてのパネルディスカッションなどがありました。



パネルディスカッション

渥美さんの「ワーク・ライフ・バランス」は自分の中に「何か」があることが大切。やりたいことがあるかどうか。今はワークとライフのインテグレーション(統合)を心掛けましょうというお話が印象に残りました。

この女性会議全体を通して感じたことは、男女共同参画は、様々な可能性を生み出す力があるということです。例えば女性が(または男性が)今まで進出しなかった分野に進出することで、新たな発想が生み出されて、それがヒット商品になり、経済発展につながる可能性があるということです。

あらゆる人がケア(家事・育児・介護)を担うこと。そして若者を経済的にもケアの部分も自立できるように育て、お手本となっていくこと。会社だけ、家庭だけではなく地域のつながりを持ち、全員が支えあいながら生きていくこと。男女共同参画の根本にあるものは「人と人のつながり」であり、ものごとの調和・バランスの重要性を再確認できました。

シリーズ マイメッセージ

テーマ「大好き」

このコーナーでは、毎号テーマを決めてメッセージを募集し、応募のあった作品を紹介します。

私の妻は外国人。授かった子ども達も今は、小学校四年生と二年生の遊び盛りの男子です。訳あって今年の一月から妻の本国の両親の元で学校生活を送っています。週末には、いつも電話で日本にいる時と同じように話をしてくれます。電話を切った後は、いつもさみしい気持ちでいっぱいになり「大好き」と心の中でさげんでいます。お正月までには、子ども達を迎えに行く予定です。もちろん「大好き」な妻といっしょに。
(KOMINATOさん 52歳)

●次回は「はじめまして」をテーマに手紙を募集します。

※2000文字位にまとめてください。なお、未発表作品に限りません。

※採用された作品については、氏名(匿名可)、年齢を、本紙「かけはし」(全戸配付)及び市のホームページにて公開いたします。

※掲載された方には粗品を差し上げます。

いきいき
ライフ
に乾杯!

『おひとりさま』を満喫していただけます

論々書院主宰 岡本まさ子さん (87歳)



好奇心いっぱい

岡本さんが語り始めると、止めどなく言葉があふれ時間を忘れます。書物の中で感銘を受けた言葉が、次から次へと出てくるのです。その記憶力、的を得た引用に感服です。読書家の岡本さんは教員時代から、気になる文章、感銘を受けた言葉が見つかるはず、メモにし、取っておく習慣があったそうです。今でも、メモを箱にしまい、機会あるごとにそれらを利用されています。

足利市で女性初の小学校教頭、校長となられ、女性軽視の時代に負けず信念を貫き、周りの理解を得られたことは偉大です。しかし、気負ったわけではなく、本人は自然体だったそうです。

また、戦時中、生徒を連れて逃げ歩いたとき、慌てて持ち出したふるしきの中は『源氏物語』の本だったと、昔のエピソードを話してくださいました。

生きている今を楽しく

一週間のスケジュールを組み、それを実行し、心豊かに毎日を過ごしておられる岡本さん。たとえ挫折しても豊かに暮らす方法を編み出し、幸せを見つけていかれるのでしょうか。おひとりさまを充分楽しんでいらっしゃる感じがえました。

なかでも、昭和58年に立上げ、院

歌(論々書院の歌)まである『論々書院』は、今の岡本さん(号「舟穂」)にとっては命のようです。

教員時代から通っていた書の恩師である白井竹舟氏の書の主張《漢字、かなに片寄らず誰にも分かる書を。希わくば分かって心引かれるものを。書の原点を忘れず、つねに日々の暮らしに生きる書を。》に深い感銘を受け、師亡き後を受け継ぎ、師の主張を広めていきたいと話されました。

今、岡本さんは、来年4月に東京で開かれる書院展に向け、日々試行錯誤のこと。取材の折も、どんな字形でどんな風にこの文字を散らしたら空間の美しさがでるのかと、様々に思いをめぐらせていらつしやいました。眠ることも食べられることも忘れる楽しい作業と話された岡本さんには、老後という言葉は全く一生青春でした。

(Mi・O)

*** 編集後記 ***

今年8月にチリで起きた鉱山落盤事故。10月13日に無事全員救出された。奇跡の救出は、現場監督のリーダーシップと仲間たちの心のつながり無しにはありえなかったという。

人が生きてゆくためには、他者とのより良い関係が不可欠である。人間関係が希薄になり、さまざまな弊害が起きている現代社会のなかでいかに自分の居場所を作るべきか、考えねばならないと痛切に感じている。

(W. A)

お知らせ

足利市女性団体連絡協議会人権研修会

- 【講師】 柏瀬眼科院長 柏瀬光寿さん
- 【テーマ】 仏の足元での医療活動
- 【日時】 12月8日(水) 午後1時30分～
- 【場所】 市民プラザ内男女共同参画センター2階研修室
- 【入場無料】

※お問い合わせは、男女共同参画室へ ☎73-8080